
三珠の社と記憶を探す旅

桜咲 雫紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三珠の社と記憶を探す旅

【Nコード】

N7900X

【作者名】

桜咲 雫紅

【あらすじ】

戦いを終わらせる代償として友の記憶を失った主人公。

記憶を戻せる可能性があると言われ、“三珠の社”を巡ることになった。穏やかで抹茶大好きな治癒魔導師と、時々俺様？になる火の魔導師、主人公の大切な家族の火の魔導師（意外と手先が器用）、“空の珠”が人型をとった空の魔導師、防御力だけ桁外れな水の魔導師、偉そうな王子様の風の魔導師。

闇と光とは違うステージで繰り広げるドタバタアクションストーリー

第一話 『禁断の森』

ドサッ

「痛って〜」

モロにぶつけた頭を擦る。もっとちゃんと着地させてくれたっていいじゃないか。“空の珠”の馬鹿野郎。

「痛そうだな」

斜め横から声が聞こえた。男の声のようだ。結構低い。だが聞いたことのない声だ。斜め横に視線を向けると、見知らぬ男が立っている。年齢は十代後半か二十代前半ぐらいか。やっぱり見たことのない顔だ。……いや……なんとなく見たことのあるような。

「俺は“空の珠”だ。もう忘れたのか」

「はあ！？あんた珠なんじゃ……」

「最後の約束忘れたのか？その記憶は消してないはずだが」

顔を顰め、男を見つめる。その顔にはありありと「こいつ、なに言ってるんだ」と書いてある。男は苦笑して

「まあいい。俺の名前は天空 空だ。覚えとけ」

ドサッ

「痛って〜」

モロにぶつけた頭を擦る。もっとちゃんと着地させてくれたっていいじゃないか。“空の珠”の馬鹿野郎。

「痛そうだな」

斜め横から声が聞こえた。男の声のようだ。結構低い。だが聞いたことのない声だ。斜め横に視線を向けると、見知らぬ男が立っている。年齢は十代後半か二十代前半ぐらいか。腰には剣を帯びている。やっぱり見たことのない顔だ。……いや……なんとなく見たことのあるような。

「俺は“空の珠”だ。もう忘れたのか」

「はあ！？あんた珠なんじゃ……」

「最後の約束忘れたのか？その記憶は消してないはずだが」

顔を顰め、男を見つめる。その顔にはありありと「こいつ、なに言
ってんだ」と書いてある。男は苦笑して

「まあいい。俺の名前は天空　空だ。覚えとけ」

「一応覚えといてやろう」

偉そうにそう言うのと、彼女はパンパンと体を叩き、埃を払って立ち
上がる。周囲を見回し顔を顰める。

「どこだよ・・・ここ」

「どっからどう見ても森だな」

空の言うとおりに左を見ても右を見ても木しかない。下は落ち葉、上
からは木漏れ日が差し込んできている。上下左右を三回ぐらい見て、
考え込む。この森、なんか見覚えあるような・・・気のせいかな？

「まあ『禁断の森』以外だったらどこでもいい」「ここは『禁断の森』
だぞ」

しばしの沈黙の後、彼女の口から掠れた声が漏れた。

「・・・・・・嘘だろ」

彼女はがくりと項垂れる。昔ここに来て酷い目にあったことがある。
よりもよってこの『禁断の森』に落ちるとは。

人々が畏怖の念を込め『禁断の森』と呼ぶこの森には、凶暴な魔獣
が数多にいるのだ。

代表例として口から火の魔法を使うヘルハウンド、風の魔法を駆使
するオルトロス、水を操るフェンリル、口から吐く息で敵を石化さ
せるコカトリス、冥界の番犬とも地獄の番犬とも呼ばれている三つ
首のケロベロス等々。上げればキリがないが、とにかくここには数
多の魔獣が生息している。別名『魔獣の森』とも『帰らずの森』言
われている。

更に、鷲の上半身にライオンの下半身を持つグリフォン、野生のド
ラゴンまでいると言われている森だ。よく無謀な挑戦者が森へ入り、
骨も残さず食われるとか・・・。

「最悪だ。よりによって『禁断の森』なんて・・・。。ずいぶん

いい所に落としてくれたね。“空の珠”」

「空と呼べって言っただろ。それに俺だってどこに落ちるかわかんねえんだよ。恨むんなら自分の運の無さを恨むんだな」

なんて言いようだ。勝手に珠の中に呼びつけ、勝手に落としという「自分の運の無さを恨むんだな」っだって？

「ふざけんな！アホ珠」

「アホ珠言うな、運悪女」

「んだと！この「グルルル」

彼女の声は何かの唸り声によって聞こえなかった。彼女と空がそおっと声の方を向くと、赤い魔力のオーラを纏ったヘルハウンドがいた。もちろんフレンドリーな雰囲気は皆無である。二人の背中を大量の冷や汗が滝のように流れていく。ごくりと唾を飲み込み、小さな声で

「どうする？」

「どうするも何も・・・戦うしかないでしょ」

「バカ言え。ヘルハウンドだぞ？勝てる訳無いだろうが。俺は今、生身の人間なんだぞ。それわかってんのか？」

「私だって人間だよ」

会話がしだいに大きく、刺々しくなっていく。二人ともすでにヘルハウンドの事など眼中にも脳内にもないらしい。ある意味すごいかも・・・。

「お前魔法でどうにかしろよ！それでも戦いの国の後継者か！！？」

「そういうお前こそ“空の珠”なんだろ。どうにかしろよ！その名前はただの飾りか？ああ？」

『やんのか！？ゴラ』

二人は同時に同じ台詞を言い、睨み合う。そのまま喧嘩に発展しそうになった二人の前から、地を蹴る音と低い唸り声が・・・。

『あっ・・・』

きっぱりさっぱり忘れていたが、こいつが居たんだっけ・・・。

「ウゝウゝウゝウゝ・・・グオー！」

『ギャー！！！！』

悲鳴をあげ、反射的に抜剣し飛び掛る空と女の子。

ザシュ

「グオーー！」

女の子の刀はヘルハウンドの左目に、空の剣はヘルハウンドの右耳に突き刺さった。ヘルハウンドの咆哮が響きわたる。首を激しく左右に振り、二人を振り落とす。

「うわっと・・・」

「げは・・・」

くると一回転し、地面に着地した女の子と、派手に頭から落ちた空。結構痛そう。女の子の上にヘルハウンドの足が迫る。

周りが影になったせいでそれに気づいた女の子は、刀を持ち上げて防御体勢をとる。

「重っ」

歯を食い縛り耐える女の子。ともすれば碎けてしまいそうな膝に力を込める。

ひゅん

左側から何か来る。女の子は風の魔法でヘルハウンドの右足を押し返し、後ろに飛ぶ。一秒後、女の子が立っていた場所を鋭い鉤爪が空を風ぐ。

「あつぶね」

危うく体が真っ二つになるとこだった。ヘルハウンドは注意深くこちらを観察している。女の子はくっ歯噛みする。このままじゃ無駄な時間を食うだけだ。

瞑目し、魔力を高める。不可視の力で羽織っていた上着が持ち上がる。

「全てを白銀に染め上げる雷の刃よ。我が求めに応じ、敵を打ち滅ぼせッ」

言い終わると、天から白い白刃のような雷が落ちてきた。その雷は

視界を白く染め上げていく。ヘルハウンドは顔を左右に振りながら暴れている。

女の子は空を立たせ、木に飛び乗り逃走。

「はぁ、酷い目にあった」

まさかいきなりヘルハウンドが現れるとは、予想外だ。空とかいう男がいつの間にかいなくなっている。どこかに落っことしてきたか。まあそんな事はいいとして、この森の出口はどこだよ。

「まいったなあ」

これじゃあ一生森をさ迷うことになるかも。冗談じゃない。やっぱ体力使うけど風の魔法で上から行ったほうがいいかな。と考えていると

「優香ちゃん？」

聞いたことのない声が自分の名前を呼んでいる。優香はゆっくり振り返る。そこには穏やかな雰囲気を感じている女の子と、驚き顔の男と、すごい勢いで駆け寄ってくる男と、辛そうに顔を歪ませている女の子がいる。あと空がいる。なんだろう。最初の三人、妙に懐かしい気が・・・。

「優香・・・よかった、無事で」

いきなり見ず知らずの男に抱きつかれ優香は対応に困り、空に視線を流す。

「お前の友達だ。お前の記憶にはないだろうがな」

「記憶・・・」

ズキンと頭に痛みが走った。左手で頭を押さえ、息をつめる。なんだろう。なんかが抜けてる・・・いや足りない気が・・・。掴めそうなほど近く、触れないほど遠い場所に何かが、ある。

優香は抱きついてきた男を突き飛ばし、数歩後ずさる。

「お前ら・・・誰だよ。何で私の名前知ってんだよ。何で記憶にないのに懐かしく感じるんだよびっくり」

怯え交じりの声で叫ぶ。まあ彼らに怯えているのではなく、記憶の

ない自分自身に怯えているのだろう。

「俺の名前は暁 連夜。あっちのが浅緑 美麗。曙 克弥だ」

どっくんと優香の体内なかで何かが歓喜の声を上げる。その名前は聞いたことがある。どこでかはわからないけど、深く、強く、刻み付けられた名前。

「暁・・・？ 私と同じ苗字」

「お前がくれた苗字だからな」

優香は怪訝そうに顔を顰める。まあ自分に記憶が抜け落ちているらしいから記憶がないのもわかる。だいたいっ、何で私は記憶を失くしたんだよ。しかも友達だけ。緋寒の事はちゃんと覚えてる。聖藍も羽翼も風華もちゃんと記憶にある。それなのに・・・。

無意識に唇を噛み締めたとき、遠くから悲鳴が聞こえた。優香ははっと顔を跳ね上げ、耳を澄ます。・・・聞こえる。女の子の悲鳴だ。

だっと走り出す。何でこの森に女の子がいるんだよ。ったく。その後に連夜達が続く。

「ちょ・・・も・・・っ・・・限界」

女の子の声がはつきり聞こえた。それと獰猛な唸り声も。

「いた」

大きな木の向こうに女の子が一人立っている。その周囲に結界が張られていて、リトルドラゴンがブレスを浴びせていた。女の子の顔は苦痛に歪んでいる。限界が近いのだろう。

「炎よ」

言下に炎が現れ、リトルドラゴンに向かって突進していく。その隙に女の子の方に行く。

「ほら、こっち来い」

女の子は大きく目を見開き、嬉しそうに笑み崩れる。

「優香」

「はっ？」

じっと女の子を見つめる。見たことない顔だ。記憶にはない、とい

うことだ。だが先ほどのように懐かしさがこみ上げてくる。

とにかく女の子を担ぎ上げ、連夜に押し付ける。そしてリトルドラゴンに向き合い、刀を構える。

「吹っ飛ばすだけにしといてやるよ」

風の魔法を全開にし、リトルドラゴンを他愛無く吹き飛ばす。

「はい、終了」

肩を揺すりながらつまらなそうに言う。風は優香に抱きつき

「生きてて良かった・・・ホントに・・・」

「えっと・・・誰？」

「何いってんのさ。碧空 風だよ。忘れたの？」

「・・・碧空・・・風？」

何故かその名前だけは胸に響いた。だがやはり思い出せない。それがどうしようもなくもどかしかった。

「お前一人でこの森に来たのか？」

克弥という男が風に聞く。風は首を左右に振り、後ろを指差して

「竜也と一緒に・・・」

風の後ろには誰もいない。風の顔からみるみる血の気が失せていく。

美麗が一言

「はぐれたんだ」

その言葉を合図に風はポケットから赤い玉のようなものを取り出し、地面に打ち付ける。地面につくと玉は弾け、赤い煙が立ち上っている。信号弾のようなものだろうか。

しばらくすると、男の子がやって来た。おそろくさっきの信号を見て必死に走ってきたのだろう。ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返している。

「竜也。早かったね」

「急いできたんだよ。それより、優香が、いたって、ホン、ト？」

「そこに」

優香は微笑を浮かべる。もしかしてこの人も私の友達なのか？まったく記憶にないんだが。ここまで記憶にないといっそ見事だと妙

なところで感心してしまう。竜也という男は優香を見て、何度も目を擦る。夢でも幻でもないとなると、嬉しそうに笑って

「本物だ・・・やっと見つけた」

「えっと・・・久しぶり？」

なんと反応していいかわからず、引き攣った笑みと共に片手を挙げる。竜也も手を上げそれに答える。何気なく優香の後ろに視線を流し

「彩夜・・・お前もいたのか」

「知り合い？」

「はっ？敵だろうが」

「知り合いなら助かった。彩夜を闇に送ってやってよ。お願い」

竜也の言葉などまったく聞かず、そういう優香。彩夜は意外そうな顔でこちらを見る。竜也は嫌そうにしながら

「仕方ねえな。お前らはどこ行くんだ？それとその男、誰だよ」

空の事を指して言う。空は腕を組みつつ名乗る。

「“空の珠”だ。今は人型をとっている。名前は天空　空だ。それから優香は俺と一緒にルーネ大陸に行く」

「“空の珠”？じゃあお前か。優香と契約いた珠は。しかもルーネ大陸ってこの森の向こうにあるとこじゃん。そこ行くのか？」

「そーいうこと」

「あのさ。早くこの森から出たいからちゃっちゃと行動してよ」

優香がイライラしながら二人を睨みつける。

第二話 サンダーライト国

というわけで、彩夜と竜也は雷の国の方へ、優香達はサンダーライト国に向かって歩き出した。

この世界には二つの大陸があり、その大陸を真つ二つにしているのが『禁断の森』である。簡単に言えば、『禁断の森』が赤道みたいなものだ。そして、片やルーネ大陸、もう片方がルシーネ大陸と呼ばれている。

“空の珠”によると封印はまだ完璧にはすんでいなくて、三珠の社を見つけないといけないそうだ。そしてルーネ大陸のどこかに“空の社”と“海の社”と“地の社”があるらしい。

だが、“空の珠”本人にもルーネ大陸のどこにあるかはわからないらしく、地道に探すしかないみたいだ。

そういうわけで、優香達一行はここから一番近いサンダーライト国を目指すことにしたのだ。が・・・

「ねえ、いつまで歩けばいい訳？」

何回目かわからない質問を口にする。いったいどこまで行けばそのサンダーライト国に着くのだろうか。町の影はおろか、人影すらない。

「あとちよつとだ」

これまた同じ言葉を返す空。体力のない凧と美麗はすでに限界に近づいているらしく、肩で息をしている。そろそろ休むかしないと倒れそうだ。連夜と克弥は表面上は平気そうだ。心中はわからないが。

「だらしねえな」

空は凧と美麗を見て呆れたように首を振る。魔法ですっ飛ばした方が速いな。

「ちんたら歩くのめんどいから風の魔法で一気に行くよ。皆、集まって」

優香の声に空を除く全員がホッとした表情を露にする。やはり疲れ

ていたらしい。全員が集まったのを確認すると、優香は魔力を高め
「風よ」

優香達を包んだ風は、空が示した方向へ進んでいった。

サンダーライト国

ここはサンダーライト国の傭兵達の溜まり場の酒場。その酒場に一人の場違いな少年がいた。

こちらでは珍しくない茶髪に、この国の貴族の象徴でもある碧眼。そして貴族とは思えないほど質素な服装。腰には刀を帯びている。おまけに周囲の傭兵が浴びるように酒を飲んでいるのに対し、一人で黙々と飯を食っているのだ。傍らに置かれたグラスの中身は、酒ではなくただの水だ。

まったくもって酒場の客らしくない。

しかし、大抵の男はさしたる関心を払わずにいた。せいぜい「変なガキだ」的な視線で少年を見るだけに留めている。だが、どんなときでも例外はある。

「おい、聞いたか？ ルシーネの話」

「聞いた聞いた。何でも火の国と雷の国の王女が消えたんだって？」
「見つけた奴には報酬に100,000,000ルースくれるんだろ？ 儲けもんだよな」

腰に剣を帯び、いかにも傭兵っぽい男達が酒を片手に大声で話している。少年は変わらず食事をとりながら、微かに目を動かす。

「だが目撃情報はおろか、生きているのかすらわかんないんだろ？」

「そうらしいぜ。もう死んでたりしてな。わっはっはっはっ」

「おい、店主！ 酒追加だ」

「こっちもだ」

「俺らんとこは飯追加だ」

そんな注文の声が飛び交う中、五人の若い傭兵達は少年を目に留めちよっとからかってやろうといった感じでニヤツと目配せしあう。まずはリーダー格の男が声をかける。

「おいおい！傭兵が酒場来て水かよ。お前それでもタマついてんのか？ なっさけねえ」

酒場がしんと静まり返った。別に怯えているわけではなく、この後の展開に期待しているのだろう。すなわち（喧嘩だ喧嘩。やっちなえ）等と思っているのだ。

少年は食事の手を休めず

「俺が何を飲もうが俺の勝手だ」

そう言ったのみ。男共は席を蹴って立ち上がる。元々喧嘩に持ち込むつもりだったので、好都合だと思ったのだろう。

「喧嘩売ってんのか！ てめえ」

いや、喧嘩売ってのはお前らだろ。という突っ込みを入れる者はおらず、男共は少年に近づいていく。早くも袖を捲くっている。やる気満々だ。少年は飯を綺麗に平らげ、水を一気に飲み干すと、カウンターにお金を置き男共に目を向けることなく歩いていく。

「無視んじゃねえ！」

男その一が少年に殴り掛かる。少年は最小限の動きでそれをかわし歩いていく。

「うおお」

今度は男その二とその三が同時に襲い掛かる。少年は蠅を払うような仕草でそれらを受け流す。男達の動きを一切見ずに・・・だ。残った二人が刀を抜き斬りかかる。少年は小さく何かを呟き、掌を広げ何かをしようとした。

「きやあゝ」

「突っ込むー！」

ドカーン ガラガラガラ

悲鳴と共に酒場の壁（木造）が大破した。そしてその壊れた壁の破片がリーダー的男にモロに当たる。リーダー的男は他愛無く倒れてしまう。

「っ・・・痛てゝ。あれ？ あんまり痛くない？」 「痛いですんでよかったですよ。ホントだ、あんまし痛くない。皆、怪我不い？」 「大福

が埃塗れになっちゃった。まあいつか、もう一個あるし」「この馬鹿！ 勢い出しすぎなんだよ」「あゝらら。これは弁償かな」「着いたか。だがこれはいささかやり過ぎなような」

埃ベール越しにムクリと起き上がった六人分の影。その影の下には哀れというべきか自業自得というべきか男一〇四までの男が呻いている。どうやらあまり痛くなかったのはこいつらのお陰らしい。

「ここがサンダーライト国か。つってもなんかの建物の中だけど」

「・・・火の国の・・・王女・・・」

「間違いない。手配書と同じ顔だ」

「ん？」

埃のベールが晴れて飛び込んできた六人の顔を見た酒場の男が手配書と見比べてる。真っ黒な髪と同じく真っ黒な瞳。刀は二本。髪は腰に届きそうなほど。いつも男のような格好をしていて、言葉遣いも男の様。間違いようがない。

「火の国の王女だ！」

「何で私の事知ってんだ？」

優香は意外そうな顔で失礼にも人を指差して断言した男をまじまじと見つめる。どこかであったか？ いや、絶対ない。誰がこんなむさ苦しい男と知り合いなもんか。

「お前の手配書がこの国にまで来たんだよ」

声のした方に視線を向けると、碧眼という珍しい眼を持つ少年が立っていた。少年は優香達をジロジロ眺め、一つ頷く。

「後継者の証を見せてもらおう」

「なんだ？ この偉そうなガキは」

年はたいして違わなそうだが・・・と連夜が小声で突っ込みを入れる。美零は近くにあった椅子と机を隅っこに避難させ、のんびりお茶を飲んでいる。克弥がふぁと欠伸をし、壁に寄り掛かる。空はこの後どうなるのか楽しみなのか、瞳をキラキラさせている。連夜は微笑笑を浮かべている。止めるでもないが、何かをするでもない。「いいから見せろ」

「ちっ、仕方ないな」

優香は上着を脱ぎ、左袖を捲くる。そこには後継者の刻印、紅い文字で『火』。

「どうやら本物のようだな」

「お前はいったい誰だよ」

「俺はサンダーライト国の王子、カツ・ルーネ・サンダーライトだ」
『……ええー!!!』

驚きの声が酒場の全員の口から飛び出した。本人曰くサンダーライト国の王子、カツ・ルーネ・サンダーライトは満足そうに笑っていた。

「なるほど。三珠の社を探している訳か」

サンダーライト国首都 リディアルにある城、リスーラ城。優香達がいるのはその城の謁見の間だ。

「はい」

優香達の前にいるのが国王のカリイ・ルーネ・サンダーライトだ。名前の通り軽そうな顔だ。空と克弥と優香はこみ上げてくる笑いを必死に堪えている。国王はしばし考え込み、隣の息子をちらっとみて決めたとばかりに膝を叩く。

「よし。君達が三珠の社を探す手助けをしよう。必要なものは何でも揃えよう」

「え……よろしいんですか？」

風が丁寧な口調で思わずといった感じで聞き返す。今会ったばかりなのに何故そこまでしてくれるのか。国王は破顔して

「ああ。ルシーネの緋寒さんと聖藍さんと風華さんと翡翠さんには世話になってるからね。私達に出来ることなら何でもさせて欲しい」
「ありがとうございます」

「ははは。そんなにかしこまらなくていい」

国王は大きく口を開けて笑い出す。そして笑い終わると近くに控えていた家来に命じていく。

「この者達を厩舎に案内しろ。そして一番合う馬を差し上げろ」

「はっ」

「それから食料の用意と旅に必要なと思われる物の用意を。急げ」

『はっ』

慌ただしく散っていく家来達。さっき厩舎への案内を頼まれた家来は、優香達を先導する。その後にカツもついていく。

「乗馬は苦手」

克弥はいささか以上に引き攣った顔でため息をつく。昔乗馬の練習をしてたとき酷い目にあったそうなの……。連夜は意地悪げな顔でニヤニヤ笑い

「俺は得意だぜ。なんなら教えてやろうか？ 『お願いします、連夜様』 って言ってみろ。ほれほれ」

「俺も得意だぜ（やったことないけど）。優しい俺様が教えてやろう。土下座して教えを請え」

「誰がッ」

噛み付きそうな勢いで振り返る。連夜は克弥の頭を撫で

「はいはい。怒らないでね、克君」

「君付けすんな！」

空は克弥の肩を抱き

「そうっかすんなよ。俺ら友達だろ」

「なった覚えはないわ！」

「うるさいな。もっと静かに歩きなよ」

凧は不機嫌丸出しの顔で文句を言う。克弥はまったく聞いておらず、空と連夜に飛び掛っている。連夜はそれを軽くいなして、空は逆襲している。カツはそれを見ながら今にもまざりたそうな顔をしている。だが王子としての立場を気にしてか、はたまたまざっているのか迷っているのか結局残念そうな顔をしながら歩いている。

「そろそろ厩舎に着きます」

案内してくれた人がそう言い、優香達は厩舎に目を向ける。そこには大きな厩舎が見えていた。

第三話 馬選びは大変？

「へえ。大きな厩舎」

優香が驚きの声を上げる。火の国にもこんなに大きな厩舎はないだろう。さすがルーネ大陸で五位に入る大国。

「こちらで皆様に合う馬をお選びになって下さい。もちろん乗っていただいても構いません。珍しい毛並みの者もいますので。皆様乗馬はご経験済みで？」

「私と連夜と克弥はね。美麗ちゃんと凧は今日初めて。空は？」

「俺は何でも出来るぞ、天才だからな」

あえて無言を決め込む一同。

「では私が乗り方のご指導を承ります。よろしいですか？」

「お願いします」

二人は丁寧な頭を下げ、文字通り手取り足取り教わっている。優香と連夜と空は馬を見て周り、自分に合いそうな馬を探す。克弥は暗い顔で馬から精一杯離れている。どうやら馬も苦手らしい。

「この馬いいかも」

優香の目に留まったのは普通の馬より一回り大きく、火の国ではまったく見ない雪のように白い毛並みと青い目の美しい馬だった（この厩舎でもこの一頭しかない）。その馬も優香の事が気に入ったのか、鼻面を押し付けてくる。案内人がこちらにやってきてほおと声を上げる。

「見る目がございますね。この馬は他の馬より見栄えが良いだけではなく、この国一の駿馬でございます。ですが誰にも懐かず、おまけに気性が荒いために乗り手がいなかったのですが……驚きました」

「私……この馬にします」

優香は雪のように白い鬘の手触りを楽しむ。その口元には優しい笑みが刻まれており、案内人は白い馬を厩舎から出しながらぽーっと

馬鹿みたいに見惚れている。それに連夜が気づき、案内人に声をかける。

「聞きたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「はっ・・・はい、すぐに」

案内人は慌てふためきつつ連夜の方に走っていく。空は佐目毛色の馬に乗ってご機嫌の様子だ。どうやら決まったみたい。

「凧と美麗ちゃんは決まった？」

馬の頭を撫でながら美麗達に聞くと、美麗は頷き凧は困ったように首を振る。

「美麗ちゃんの馬はどの子？」

「この子だよ」

美麗が選んだ馬は、栃栗毛という毛色の馬だった。（栃栗毛とは、栗毛よりもやや暗い毛色。青毛の次に少ない。）足は結構速いそう。凧はどの馬がいいか自分でもわからず、困っているそう。

「毛並みは何がいいんだ？」

優香は一頭一頭見ながら凧に問う。凧は「栗毛で」と答える。優香は栗毛の中でも足が速く大人しそうな奴を探す。

「こいつなんかどうだ？」

黒みを帯びた栗毛の馬を指す。一応乗ってみて、凧は驚いたような顔をして

「この子がいいかも」

「かもかよ」

「良かったね。凧さん」

連夜の方を見てみると、青毛の馬に乗っていた。（青毛とは全身真っ黒の最も黒い毛色。季節により毛先が褐色を帯び青鹿毛に近くなることがある。比較的少ない毛色）。どうやら決まったようだ。残るは克弥だけ・・・なんだけど。

「克弥？」

「俺は馬が苦手なんだよ」

数メートル離れた場所から恐る恐るこちらを見ている克弥がいた。

ていうか馬選べよ。アホ。空と連夜がニヤツと笑い、佐目毛の馬と青毛の馬に乗ったまま克弥に近づく。克弥はゆっくり、だが確実に後ずさっていく。

「何で逃げんだよ。一緒に馬選ぼうぜ？なあ」

「そうそう。一緒に選ぼうよ。克弥くくん」

「こっち来んな」

追い掛け回す空と連夜。逃げ惑う克弥。確かに面白いが、そこまで必死に逃げなくてもという思いがないでもない。

「ハイハイ。遊んでないでさっさと選んで」

「うう。鬼か、お前は」

泣き声を上げつつも馬を見て回る。動きが若干以上にぎこちない気がするが、気にしない事にしよう。

克弥は一番最初の馬を指差し

「俺こいつでいい」

半分投げやりの口調だ。案内人は「ホントにいいんだな」という顔で月毛という白毛の次に珍しい毛並みの馬を克弥の方へ連れて行く。（月毛とは、クリーム系の色。金色にも見える馬体から好む人も多い。白毛の次に珍しい）克弥が手を伸ばす。刹那、馬の行動に案内人以外の全員が驚いた。何をしたのかというと、プイと顔を背け尻尾がモロに克弥の頬にクリーンヒット。おまけに後ろ足で克弥の事を蹴り飛ばす。本人案内人以外の全員大爆笑。

「この馬は白毛のより気性が荒く、男性には決して懐かないのです」

「先に言っとけよ」

克弥はがくりと項垂れる。案内人は申し訳なさそうに頭をかく。月毛の馬は小さく嘶き、馬鹿にしたように克弥を見下ろす。克弥は拳を握り締め

「上等だ。俺はこいつにする。俺を馬鹿にしたこと、後悔させてやる」

とにもかくにもこれでようやくそれぞれの馬が決まったのだった。

「忘れ物、すんなよ」

連夜の言葉に全員が持ち物を確認する。忘れ物なし。必要なものは全部持った。いつでも出発できる。

「いろいろありますがございしました。食料に飲料水、さらに馬やら魔テント等たくさんいただいでしまつて・・・」

凧が丁寧にお礼を言う。国王は大口を開けて笑い

「いいんだよ。困ったことが合ったらいつでも連絡してきなさい。出来る限り、力になろう」

「重ね重ねありが」そろそろ行くか。楽しみだなく。こういう冒険してみたかったんだよ。ワクワクする」

凧の言葉を粉碎して馬上で瞳をキラキラさせている。世間知らずの箱入り娘が初めて城から出るんじゃないし、少しはしゃぎすぎじゃないか。まあいいけど。

「お前いい加減観念しろ！」

克弥の怒鳴り声が聞こえる。目を向けると、月毛の馬といまだに格闘している。まだ乗せてもらえないのかよ。こんなんで大丈夫か。心配になってきた。

「一つだけ頼みがある」

国王それぞれの目と順に目を合わせる。優香達が首を傾けていると、国王は一気に

「我が息子、カツを連れてつてくれ」

『はっ！？』

思わず聞き返す優香達。カツは意外そうな顔で父を見て、次に優香達を見る。国王は息子の頭に手を置き

「カツは今まで首都　リアルから出たことがない。だから世界を見せてやりたいのだ。他国を見、旅を経て、いろいろな事を見聞きして欲しい。王子としてではなく、一人の男として」

「まあ・・・私達は一向に構わないけど・・・。剣術とか攻撃魔法とか使える？夜盗とか山賊とかに襲われたとき、大変だよ？私達がいつでも護れる訳じゃないし」

「私、治癒魔法しか使えない……。剣術は素人に毛が生えた程度しか……。」「私、防御魔法しか使えない。剣技は素人以下……。」「美麗と風が落ち込んでいる。空が欠伸をしながら

「お前らには俺らが剣術叩き込んでやるよ。必要最低限、自分のみを守るようにな」

「攻撃魔法も教えてあげるから落ち込むなよ。打たれ弱い奴らだな」
優香の言葉がぐさりと突き刺さったのか、更に落ち込む二人。克弥は連夜に指を突きつけ

「こいつらに教えた後、俺と手合わせしろ」

「いいよ。ボッコボコにしてあげる」

「返り討ちにしてやる！」

「ハイハイ。出来んならね」

カツはそんな優香達を見て、決心したのか国王に

「俺、行ってくるよ。自分の目で世界を見たい」

「剣術と魔法は使えんの？」

「剣術は人並程度。魔法は中級魔法までなら」

優香達は軽く目を見開く。失礼だが、王族が……。しかも王子が剣術と魔法を使えるとは思ってなかった。確かルシーネと違ってルーネは魔法を使える者が滅多にいないらしい。その代わりかわからないが、ルーネは魔道具にたけているのだ。国王がくれたテントや食料と飲料水等を入れとく袋も魔道具だ。

袋の説明だけするが、この袋は食べ物や飲み物をどれだけ入れようと容量を超えない限り（その容量も桁外れ）いくらでも詰め込める便利な袋だ。食料用や飲み物用、更には着替え用や家用やら種類は豊富だ。食べ物の場合は、中の物が腐らないようになっている。それに加え重くない。

「へえ、ちよつと意外」

克弥が正直に全員の心の声を代弁する。国王は柔らかな笑顔で息子を見て

「この子は魔法の才能があったんですよ。属性は風。それから、警

告があります。心して聞いてください」

国王は一同を見回し、低い声で

「人目につくところで魔法を使ってはいけません。これは覚えておいてください」

「何故ですか？」

美麗が不思議そうに聞く。ルシーネでは魔法を使うのが当たり前。そのためそのルシーネが全てだった優香達にとって、魔法を使わないということは理解できないことなのだ。

「ルーネは魔法が廃れ始めた大陸。むしろ魔法を使える人間などこの世にいないと思ってる大人がいるくらいです。早い話、魔道具しか知らないんです。

我が国はルシーネと交流が盛んなため、魔法を使えるものは少数ですがいます。魔法があることも忘れてません。ですが、他国もそうとは限りません。

もし魔法をまったく知らず、使える人を見たこともない国で君達が魔法を使えば、その国の人達はと思う？ 奇跡だと騒がれるならまだしも「魔女だ」「化け物」と言われる可能性は充分ある。ヘタすると殺される事だって考えられる。

それに人売り共や天上人の目に留まるかもしれない。

杞憂に終わればそれでいいが、そうでない確立の方が多い。とにかく注意しておくに越したことはない」

「わかりました」

「それからもう一つ、天上人には気をつけて。金ぴかの上衣が目印です。これも覚えといて。そしてその天上人に会ったらそいつらが例え何をしてでも絶対に手を出さないこと。これだけは守って。そいつらは聖地サルクロスにいる。もう一度言います。その聖地サルクロスで何が起こつても、例え目の前で人が殺されても絶対に天上人には手を出すな」

「……………そろそろ行くか。国王さん、いろいろありがとう」
馬に飛び乗り、礼を言う優香。他の人も馬に乗り、口々に礼を言う。

克弥は月毛の馬に無理矢理飛び乗る。月毛の馬は嫌そうに嘶き、しぶしぶといった風に大人しくなる。

「行ってきます！」

国王に手を振り、一行の旅が始まった。

第四話 驚きの事実

「そういえば、次の目的地は？」

しばらく歩いてから凧が優香に優香に聞く。優香は首を傾け

「知らん」

「—————は？」

「だから知らん」

「『知らん』じゃないでしょ！急いで国王に聞きに戻らなきゃ・・・」

凧が馬首を返そうとしたとき、カツがため息をつきつつ鞆から地図らしき物を取り出して、凧に投げる。

「わっ・・・と・・・地図か。ありがた・・・」

地図を広げた瞬間、語尾が消え凧は固まってしまった。凧の近くにいた美麗が凧の横へ馬を寄せ、地図を覗き込む。そのまま十秒ほど黙り込み、何もなかったかのように座り直す。

「その沈黙は何？」

連夜はくっくつと笑いながら二人に聞くが、美零は黙って笑うのみ。凧に至っては硬直したまま動かない。いったいどうしたのだろうか。克弥は凧の手から地図を引ったくり、広げる。連夜と空と優香も近くにいて地図を見る。

書かれているのは蝶下手くそな一応地図みたいなもの。地形はどうかわからないが、国と首都がバラバラだ。とてもじゃないがルーネ大陸の地図とは思えない。というか空想上の地図に思える。

地図の左端には同じく下手くそな字で「byカレイ（笑）」と書いてあるので、これを書いた大ばか者の正体はわかった。

克弥は無言で地図もどきを握り潰す。連夜は軽やかな笑い声をあげ、膝を叩いている。彼には受けたらしい。よかったな、国王。

優香は馬首を返そうとして空に止められている。その空も怒りの焰を立ち上らせている。

カツはそれらの反応を見て、あくららと言わんばかりの顔で空を仰いだ。今日は突き抜けるほどの青空だ。良い一日になりそうだ。

その後近くの店で確かな地図を買い、一行はサンダーライト国の南に位置する化け猫村を目指すことにした。理由は簡単。店の人が「あそこには二足歩行する猫や人型をとる猫や喋る猫、更に尻尾が二本以上ある猫がいるって噂があつてな。あそこには誰も寄りつかないんだよ。今から二十年以上も前に廃村になつて。皆、気味悪がつてるんだ。あんた方も行かない方が身の為だよ」という言葉を聞き、美麗と優香と連夜と空と克弥が『行きたい』と言いだし、凧とカツの反対を押し切り行くことになったのだ。

「美麗ちゃんって猫好きなんだ」

優香は馬上で伸びをしつつ言うと、美麗は一瞬驚いたような顔をして、すぐに納得したように頷き

「そうだよ。猫ちゃんラブ」

「私は断然犬派だけど、猫も可愛いよね。空達はどっち派？」

後方に声をかける。空達は顔を見合わせ、凧から順に連夜、空、カツ、克弥という順で答えていく。

「犬かな」「俺は断然犬派」「犬・・・かな。どっちも」「猫

派」「猫は苦手。なに考えてんのかわかんないし、身勝手だから。

主人に忠実な犬は好き」

そんな理由かよ。全員が心の中で突っ込む。

「動物繋がりで思い出したけど、皆馬の名前決めたか？」

連夜が馬の首を擦りながら今気付いたと言わんばかりの顔で周囲を見回す。ある者は頷き、ある者は今頃ながら考え込む。どうやら決めてない者がいたらしい。頷いた者が馬に手を当て、名を言う。

「馬の名はアクア。お腹にある模様が水みたいだから」

わざわざ名前の由来まで話してくれた凧。次いで克弥が偉そうに胸を張り

「俺の馬は馬鹿馬。いい名前だろ？」

いい名前もなにも・・・すでに名前としてどうかと思うが。というか私が月毛の馬だったら絶対に嫌だ。抗議する。

案の定月毛の馬は怒りを露にし、暴れ始める。暴れるだけでなく、嘶いている。馬ではないのでなんと言っているのかわからないが、おそらく「ネーミングセンス悪過ぎだ!! マグマで顔洗って出直せッ」的な事を言ってるようだ。いや、あの様子では更に口汚く罵ってるのかもしれない・・・。

連夜と凧とカツが器用にも馬の上で笑い転げている。美麗も口元を押さえて笑ってるし、空など大口を開けて人目を憚らず笑っている。周囲の人々が何事かと凝視してしまうほどの音量だ。

優香は馬の上で蹲っている。必死に笑いを押し殺しているようだが、声が漏れている。克弥は落馬しないよう懸命に体勢を保っている。落馬したが最後、踏み潰されて痛い所の騒ぎではない。最悪の場合、そのまま天へ・・・なんてことになりかねない。

「別の名前つけてあげなよ。そしたら大人しくなるかもよ?」と凧が提案しても「なんか負けたみたいで悔しいから嫌だ」と即座に答えが返ってきた。

「じゃあ私が名前付けてあげるよ。ムーンってのはどう? こっちで月って意味だよ」月毛の馬は暴れるのを止め、嬉しそうに美麗に擦り寄る。どうやら気に入ったらしい。克弥はほっとため息を漏らし、頭をかく。しばらくそうして、投げやりな口調で

「わーったよ。ムーンな、ムーンって呼べばいいんだろ。つくそ」ブツブツ言いながらムーンの鬣に触れる。ムーンは首を左右に振り、嫌そうな雰囲気や体中から滲み出す。克弥は笑顔でムーンに「やっぱお前、アホ馬だな」と言い、喧嘩勃発。とことん合わないらしい。優香は白い見事な鬣に手を置き、決めたとばかりに膝を叩き

「スノー・・・。スノーってのはどう? こっちでは雪っていう意味なんだ。お前の白い姿にはぴったりだと思っただけだ」

セリフが終わるか終わらないかのうちに、スノーは嬉しそうに嘶く。優香はスノーの頭をぽんぽん撫で

「決まりだね。よろしく、スノー」

スノーは（偶然に違いないが）頷く。実にタイミングがいい。連夜と空とカツと美麗はそれぞれ難しい顔で考え込んでいる。そこからいち早く抜けたのは、美麗と連夜だった。先に美麗が

「この子の名前はリーフ。額に葉っぱみたいな形の痣があるから」

「こいつの名はナイト。夜闇のような黒い体には似合いの名前だろう」
二人の馬はニカツと笑う。返事のつもりだろうか？空はうくと唸り、突然閃いたのか膝ではなく馬を叩く。馬はてきめんに機嫌を悪くし、空を振り落とす。

「痛ってー。そうだ、名前決めたんだ。ライリ」

「俺のはサンダーっていうんだ。いい名だろ」

「故国の取ったのか」

「うん。俺、あの国が好きなんだ」

照れ臭そうに微笑むカツ。そんなカツを見て、優香はどこか寂しそうな顔をする。故国、か。ついこの間まではそこにいるのを当たり前だと思ってたのに・・・まさか旅に出ることになるとは。しかもあるかどうかも定かではない三珠の社を探す旅とは。緋寒に言ったらどうなるかな・・・きつとこう言うだろう。「そんな訳わかんないものを探す暇があるんなら仕事しろ！それか剣術でも磨いてろ、アホ」とか言いそう。いや、もしかしたら「行ってもいいぞ。その代わりに帰ってきいたらその間に溜まった書類を徹夜で片付けてもらおう。それでもいいか」とかかな。うん。こっちの言いそう。

「くっ」

想像上とはいえあまりに的を射ている気がして思わず笑みが零れた。何故だろう。ついこの間緋寒に会っているのに、もう一年ぐらい会ってない気がする。髪も伸びてる気がするし・・・。まっ気のせいだろ。

「会いたいな」

ポロツと口から漏れた言葉を、連夜が聞いてたみたいで

「誰にだ？」

「えっと・・・耳良いね。緋寒にだよ。もう一、二年会ってない気がするんだよ」

そう言うと、連夜は顔を顰めて難しい顔で考え込む。どうやら連夜にも心当たりがあるようだ。周りを見ると、美麗と克弥も同じように首を傾げている。

「それもそうだろうな。お前らが消えて二年半も経ってんだから」
一同はそれぞれの体勢のまま音を立てて固まる。そしてぎこちなく首を回し、ロボットのような口調で

「ナンダッテ？」

「だ・か・ら、お前らが消えてから二年半経ってんだって。なんだ、知らなかったのか？」

知らなかったとも。初耳だ。風の方へ視線を流すと、風は無言で頷き止めをさしてくれた。空が暢気な声で

「ああ、言い忘れてたがお前らの体もちゃんと二年分成長してるから安心しろ。その証拠に髪とか身長とか伸びてるだろ？それに優香の傷口も塞がってるし」

「傷？」

なんだそれは、と顔を顰める優香。私がいつ傷を負ったんだ？全く記憶にないんだが。美麗と連夜と克弥と風はいつせいにこっちを見て詰め寄ってきた。

「ちよっと背中見せて」「さっさと脱げ」「すっかり忘れてた」「早く！」

勢いに押されて優香は引き攣った笑みを浮かべる。一体全体何がどうしたというのだろうか。服を捲ると、四人が息を呑む気配がする。なんなのだろうか。

「傷が・・・」

驚いたような声が後ろから聞こえる。辛抱強く待っていると、空が「なっ？塞がってんだろ」

優香の背中には歪な傷口があった。そこは連夜が斬り付けた傷だ。一応塞がっているが、激しい運動をすれば開いてしまうだろう。

「用心の為治癒しとくね」

第五話

治癒が終わる頃にはすっかり日が暮れて辺りは真っ暗になっていた。

「ねえ、化け猫村までどのくらいかかるの？」

ずっと疑問に思ってた事を口にする風。優香は近くに宿はないかときよろきよろしながら世間話をするような軽い口調で

「二週間」

「・・・二週間？」

「そっ、二週間だよ」

沈黙を返す風。優香の顔を見る限り、冗談ではなさそうだ。そしてさもついでと言わんばかりにこう付け足す。

「そうそう。まともな宿に泊まれんのはあと五日くらいしかないかな。あとはずっと野宿みたいだ。国王がそう言ってた。魔獣とかに襲われないようにってさ」

「そうだな。この速度で行ったらあと六日後ぐらいには『人食いの森』に入るからな。用心しといた方がいいぞ。あそこは『禁断の森』の次の次ぐらいに危険な森らしいから」

カツが余計な補足をしてくれた。風は表情こそ変えなかったが、心中では悲鳴を上げていた。『人食いの森』ってなんだよッ。物凄く嫌な予感がするんですけど。行きたくねえ。

「退屈しなさそうだなによりだ」

克弥は心底楽しそうな声で掌に拳をぶつける。早くも行く気満々だ。だめだ。こいつとは精神構造が違いすぎる。

「どんな魔獣がいんのかなく。戦ってみてえ」

優香がまだ見ぬ魔獣に期待を膨らませながら鞘を鳴らす。どんだけ戦いが好きなんだよ。美麗の方を見ると、流麗な字で和紙に何かを書いている。横から覗き込み声に出して読んでみる。

「えーと。浅緑 美麗、六日後に魔獣に食べられて死亡。骨が残っていたら故国に埋めて下さい・・・って遺書書くな！」

美麗の手から和紙を取り上げて破り捨てる。美麗はお茶を飲みつっぱば棒読みの声で

「なにをするのさ。せつかく綺麗に書けたのに」

「遺書を綺麗に書いてどーすんだ。まったく」

ぶつぶつ言いつつ空と連夜に視線を流す。

「やっぱりグリフォンとかいんのか？あとはケロベロスとか」

「目撃情報は数多に寄せられてます。が、ほとんどは見間違いとかがデマですね。それに『人食いの森』に入って出てこれた人は滅多にいないですよ」

出てこれた人は滅多にいない？おいおい。『禁断の森』と同じくらい危険なんじゃないのか？そんなところに向かってんのかよ。これは遺書を書いた方がいいかもしれない。

「へえ。まっ魔獣が襲ってきたら返り討ちにしてやるよ」

不敵な笑みを浮かべる連や。その瞳は好戦的に輝いている。あゝあ。これじゃあ行きたくないって言っても無駄そう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7900x/>

三珠の社と記憶を探す旅

2011年11月4日10時08分発行